

南西諸島における高出生率と子育てを支える地域社会：徳之島伊仙町における育児支援の構造

吉武, 由彩
熊本大学大学院人文社会科学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/7151779>

出版情報：人間科学共生社会学. 12, pp.75-90, 2023-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

南西諸島における高出生率と子育てを支える地域社会

— 徳之島伊仙町における育児支援の構造 —

吉 武 由 彩

要 旨

日本社会において少子化の進展が指摘されるものの、合計特殊出生率は地域差も大きく、子育てをめぐる状況も地域社会によって大きく異なる。本稿では、高い出生率を示す鹿児島県大島郡伊仙町を調査対象地域とした。伊仙町において2018年に実施した質問紙調査の結果や、2016年および2020年に役場職員、子育てに関するNPO、子育て中の住民、Uターン・Iターン者、福祉専門職に対して実施した聞き取り調査の結果から分析を行った。

質問紙調査において伊仙町における子育て支援やサービスが整っていると思うか尋ねたところ、肯定層約4割、否定層約4割と評価がわかれた。肯定層に対してその理由を尋ねたところ、「家族や親せきからの援助を受けやすいから」、「児童館や子育て支援センターなどの公的サービスが充実しているから」、「近隣住民からの援助を受けやすいから」という回答の割合が高かった。伊仙町では「子は宝」という考え方があり、家族、親せき、地域社会が子育てを支援する環境があることがわかった。また、地域での行事や集まりの場も多く、子どもや家族と過ごす時間、親せきや地域の人々と集まって活動をする時間に幸福を感じる人々の姿がうかがえた。

キーワード：南西諸島、高出生率、子育て、地域社会、家族

1. 南西諸島における高出生率

日本社会において少子化の進展が指摘され、子育て支援の充実が急務とされている。子育てを家族のみが担っていくことの限界から、子育てを地域社会で支えていくことの重要性が認識されている。年間の出生数は1973年には200万人を超えていたが、それ以降一時的には増加や減少をくり返しながらも、全体としてみると減少傾向が続いている（内閣府 2022）。2020年には出生数は約84万人になっている。合計特殊出生率も1970年代前半まではおおむね2.0を超えていたものの、1975年以降は低下傾向が続き、2020年には1.33となっている。

他方で、合計特殊出生率は地域差も大きく、子育てをめぐる状況も地域社会によって大きく

異なるだろう。表1は市区町村別にみた合計特殊出生率の上位・下位10位をそれぞれ示したものである(2013~2017年の市区町村別の合計特殊出生率)(厚生労働省 2020)。合計特殊出生率が高いのは、沖縄県国頭郡金武町2.47、鹿児島県大島郡伊仙町2.46、鹿児島県大島郡徳之島町2.40となっている。他方で、合計特殊出生率が低いのは、大阪府豊能郡豊能町0.84、京都府京都市下京区0.89、福岡県福岡市中央区0.91となっている。合計特殊出生率が高い市区町村と低い市区町村では大きな差があることがわかる。

表1からは鹿児島県や沖縄県などの南西諸島において合計特殊出生率が高いことがわかる。子育てをめぐっては、これまで都市部を対象とした研究が重ねられてきたが、農村部を対象とした研究は多くはなかった。もちろん農村部においても多様性が認められるものの、本研究では九州の過疎地域のひとつとして鹿児島県大島郡伊仙町を取り上げて分析を行う¹⁾。伊仙町は、鹿児島県の離島(徳之島)にある町であり、合計特殊出生率2.46と全国的にみても非常に高い。本研究では伊仙町という高出生率を示す地域を対象に育児支援の構造について分析し、それにより南西諸島における子育てを支える地域社会について考察を行う。

先行研究を整理すると、先にも述べた通り、都市部における子育て支援を扱った研究が多いものの、南西諸島の高出生率を扱った社会学の研究も少ないながらもみられる(徳野 2014; 片桐 2002, 2005)。鹿児島県の離島である沖永良部島(和泊町と知名町の2つの町がある)をフィールドとした研究では、沖永良部島における高出生率について生活構造論の観点から分析がなされる(徳野 2014)。この時「生活構造」とは、「個人及び世帯・家族・集落・職場を軸とした生活主体の日常生活を支えるための諸生活要件群から構成され、その個人および集団の維持・存続を計るために、生活主体が行っている要件の充足のための仕組み、もしくは連関システム」(徳野 2014: 174)と定義される。沖永良部島について地域の経済、産業、インフラ面での条件不利がみられても、家族、親族、集落、近隣関係などの社会関係や共同性が保たれていることが、生活のしやすさや子育てのしやすさにつながっていることが指摘される。沖永良部島の人々が冠婚葬祭、祝い事、スポーツや趣味の会、町民運動会や町民文化祭など、さまざまな地域社会における行事や団体に参加し、そうした場への参加を通して人間関係が形成・維持されているという(徳野 2014)。同様の指摘は、同じく沖永良部島をフィールドとした研究でもなされており、子育てにおいて近居の家族や親族からのサポートを得やすいこと、近隣関係の緊密さと活発な相互扶助の存在が報告されている(片桐 2002, 2005)。これらの先行研究の指摘を踏まえ、本研究でも伊仙町という高出生率を示す地域を取り上げるにあたり、生活構造論の観点から分析を行う。とりわけ家族や地域関係の観点から伊仙町における子育てについて分析を行い、育児支援の構造を明らかにする²⁾。

表1 市区町村別にみた合計特殊出生率の上位・下位10位

上位 順位	市区町村	合計特殊 出生率	下位 順位	市区町村	合計特殊 出生率
1	沖縄県国頭郡金武町	2.47	1	大阪府豊能郡豊能町	0.84
2	鹿児島県大島郡伊仙町	2.46	2	京都府京都市下京区	0.89
3	鹿児島県大島郡徳之島町	2.40	3	福岡県福岡市中央区	0.91
4	沖縄県宮古島市	2.35	4	大阪府大阪市浪速区	0.92
5	沖縄県島尻郡南大東村	2.30	5	京都府京都市東山区	0.93
6	沖縄県国頭郡宜野座村	2.29	6	東京都豊島区	0.94
7	鹿児島県大島郡天城町	2.28	7	京都府京都市上京区	0.95
8	鹿児島県大島郡知名町	2.26	8	北海道石狩郡当別町	0.96
9	熊本県球磨郡錦町	2.26	9	大阪府大阪市中央区	0.97
10	沖縄県島尻郡南風原町	2.22	10	埼玉県入間郡毛呂山町	0.97

出典：厚生労働省（2020）より

2. 鹿児島県大島郡伊仙町の地域的概要

鹿児島県大島郡伊仙町を取り上げるにあたり、地域的概要を確認する。伊仙町は鹿児島県の離島（徳之島）にある町である。南西諸島の奄美群島に含まれている。徳之島には、徳之島町（人口10,147人）、天城町（人口5,517人）、伊仙町（6,139人）の3町がある（2020年国勢調査）。3町の合計人口は21,803人である。県庁所在地の鹿児島市から南へ約468kmに位置し、面積248.02km²、周囲89.2kmの離島である（鹿児島県 2021；鹿児島県大島支庁 2015）。鹿児島市からはフェリーで約15時間、飛行機で約1時間の距離にある。耕地面積が全面積の27.8%（6880ha）と広く、サトウキビ、バレイショ、タンカン、カボチャ、園芸・果樹などの農業や、徳之島牛（黒毛和種）などの畜産も盛んである。また、闘牛が盛んで、徳之島地域文化情報発信施設である「徳之島なくさみ館」には闘牛に関する資料館が併設されている。「子宝の島」として知られ、合計特殊出生率は徳之島町2.40、天城町2.28、伊仙町2.46と高い。「長寿の島」としても知られている。

ここまで徳之島の地域的概要を確認してきたが、ここからは徳之島の中でも伊仙町の詳細な概要について確認する。伊仙町は人口6,139人、2,783世帯であり、年齢階層別の人口の割合は15歳未満16.0%、15～64歳46.1%、65歳以上37.8%である（表2）。人口は減少傾向にある（表3）。1920年には17,800人であったが、2020年には6,139人になっている。合計特殊出生率の推移をみると長期に渡り高出生率が続いている（表4）。

表2 伊仙町の地域的概要

項目	概要
人口	6,139人
2015～2020年の人口増減率	-3.51
世帯数	2,783世帯
平均世帯人員	2.21人
年齢階層別割合	15歳未満16.0%、15～64歳46.1%、65歳以上37.8%
配偶関係	未婚20.6%、有配偶55.7%、死別14.4%、離別9.1%
世帯構造	単独世帯37.1%、夫婦のみ世帯25.4%、夫婦と子どもからなる世帯20.3%、子どもとひとり親世帯12.0%、核家族以外の親族世帯4.3%、非親族世帯0.7%
職業	管理的職業従事者1.3%、専門的・技術的職業従事者13.0%、事務従事者15.6%、販売従事者6.1%、サービス職業従事者13.9%、保安職業従事者0.9%、農林漁業従事者30.0%、生産工程従事者5.4%、輸送・機械運転従事者2.3%、建設・採掘従事者6.0%、運搬・清掃・包装等従事者5.3%、分類不能0.3%

出典：2020年国勢調査より

表3 伊仙町の人口推移（人）

1920年	1930年	1940年	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	2020年
17,800	15,663	13,725	17,190	16,234	12,142	10,318	8,822	7,769	6,844	6,139

出典：2020年国勢調査より

表4 伊仙町の合計特殊出生率の推移

1993～1997年	1998～2002年	2003～2007年	2008～2012年	2013～2017年
2.49	2.47	2.42	2.81	2.46

出典：厚生労働省（1999, 2004, 2009, 2014, 2020）より

3. 調査の概要

鹿児島県大島郡伊仙町において20歳以上の住民2,000人を対象に「伊仙町における住みよい地域づくりアンケート」を実施した。調査は生活構造研究会（研究代表：高野和良、九州大学）により実施されたものである。調査実施にあたっては科学研究費補助金の助成を受けている。調査は郵送法にて2018年1月30日～2月末に行い、回収率は21.7%（回収数434票）であった³⁾。標本抽出は伊仙町役場の協力を得て、住民基本台帳登載者からの無作為抽出を行った。本調査は離島地域である伊仙町住民の生活実態の把握を目的として実施したものである。また、2016年12月10～12日および2020年1月24～26日にかけて伊仙町および徳之島町において、伊仙町役場職員、子育てに関するNPO、子育て中の住民、Uターン・Iターン者、福祉専門職などへの聞き取り調査、出産祝い行事の参与観察を行った⁴⁾。

次に、質問紙調査の回答者の属性について提示する。回答者の属性は男性50.2%、女性49.8%である。年齢は30代以下12.8%、40～50代27.1%、60～70代45.1%、80代以上15.4%である。世帯構造は一人暮らし19.5%、夫婦だけの世帯41.0%、夫婦と親だけの世帯2.0%、親と未婚の子どもの世帯27.3%、三世代以上で暮らす世帯1.8%、その他の世帯8.4%である。居住歴については、「この地域の生まれで、ずっとここで暮らしている」17.6%、「よその生まれだが、子供の時からずっと徳之島に住んでいる」2.2%、「よその生まれだが、自分や家族の仕事の関係で転居してきた」8.1%、「よその生まれだが、結婚のために転居してきた」5.4%、「学校や就職で2年以上よそに出たが徳之島に戻ってきた」64.8%、「よその生まれだが、徳之島の良さにひかれて転入してきた」1.0%、「その他」1.0%である。家計状況は、「かなり余裕がある」3.2%、「ある程度余裕がある」44.3%、「あまり余裕はない（少し苦しい）」40.6%、「まったく余裕はない（かなり苦しい）」11.8%である。職業は農業29.8%、自営の商工業7.4%、民間企業の事務職員4.6%、工場での作業員1.5%、土木・建築作業員2.0%、トラックやタクシーの運転手1.0%、商店などの店員2.8%、公務員7.7%、農協・森林組合の事務職員0.8%、看護師・介護福祉士・ホームヘルパーなどの福祉医療関係6.4%、専門職4.6%、管理職1.5%、専業主婦・主夫10.5%、学生1.0%、無職19.9%、その他11.0%である。

4. 伊仙町における生活と子育て

4.1 地域の生活環境評価と地域意識

育児支援の分析に先立ち、伊仙町住民の地域の生活環境に対する評価をみていく。伊仙町の地域住民は伊仙町での生活をどのように評価しているのだろうか。図1からは、「就業の場に恵まれている」、「やりがいのある仕事に恵まれていること」、「買い物の便利さ」、「病院や医療が整って安心なこと」、「高齢者などへの社会福祉が整っていること」の各項目に関しては、評価が低いことがわかる。他方で、「自然環境」、「災害や事故がなく、安全なこと」、「快適な住まい」、「困った時に助け合える仲間が大勢いること」、「教育環境」に関する評価は高く、「全体的に見た地域の住み心地」では8割（80.3%）が肯定的評価をしていた。

次に、伊仙町住民の地域意識についても確認する。図2からは、地域住民が伊仙町について「この地域はこれから生活の場としてだんだん良くなる」とは捉えていないことがわかる。しかしながら、「今住んでいる地域が好きだ」や「今後もこの地域に住み続けたい」については、8割超が「そう思う」あるいは「まあそう思う」と回答している。「この地域のために何か役に立ちたい」についても、7割超が「そう思う」あるいは「まあそう思う」と回答している。

つまり、図1および図2からは、過疎地域である伊仙町において生活するにあたり、買い物や病院の不便さ、就業の場としての評価の低さなどもあるものの、そうした評価の低さにも関わらず、地域住民は「全体的に見た地域の住み心地」へ大多数が高い評価をしているのであり、「今後もこの地域に住み続けたい」、「今住んでいる地域が好きだ」と捉えていることがわかる。

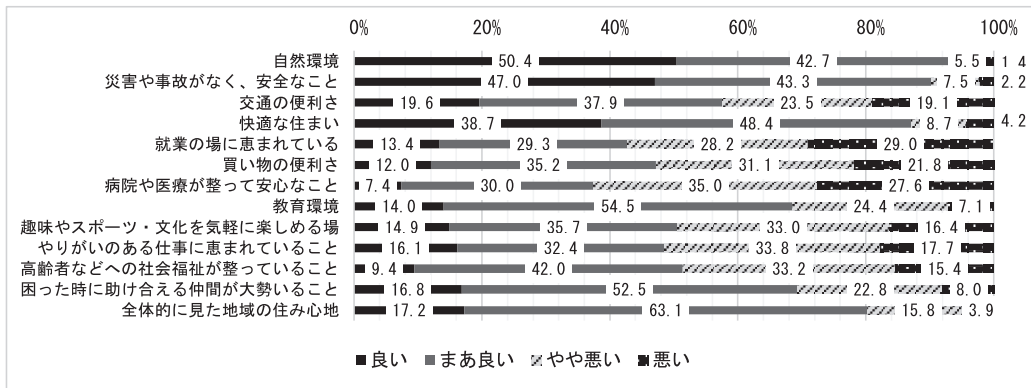


図1 地域の生活環境に対する評価

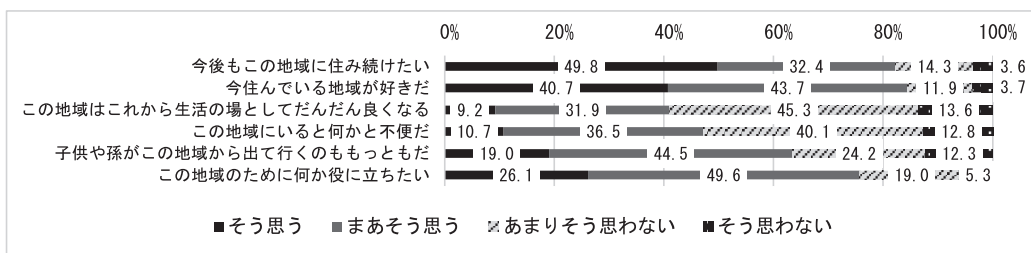


図2 地域意識

4.2 子育てに関して — 家族や親せきからのサポート

伊仙町における子育てについて分析を行うにあたり、子育てに関する質問項目の単純集計結果について表5としてまとめた。回答者のうち子育て経験が「ある」人は約8割（83.4%）を占める。子育てをしていた（いる）地域は、「伊仙町」が約8割を占める（78.9%）。子どもの有無については、「いる」人は約8割である（81.3%）。子どもが「いる」人々について子どもの人数を尋ねたところ、「3人以上」は6割超（61.4%）、「4人以上」は3割超（32.7%）となっており、子どもの人数が多いことがわかる。

世帯構造はどのようになっているのか。この点については、「現在の世帯構造」は尋ねたものの、「子育てをしていた（いる）時期の世帯構造」としては尋ねていない。そこで、代替案として「現在高校生以下の子どもがいる世帯」に限定して、世帯構造を確認した（N=90）。その結果、「三代以上で暮らす世帯」はほとんどいないことがわかった（2.4%）。これは表2および3節の調査概要で確認してきた伊仙町の世帯構造の特徴とも整合的である。

それでは、表5をふまえたうえで、回答者は伊仙町における子育てで支援やサービスについてどのように評価しているのかをみていきたい。今回伊仙町における子育てを分析するにあたり、子育て経験がある人々のうち、伊仙町において子育てを経験したと回答した場合にサンプルを限定して分析を行う（N=247）。これらの人々に「あなたの住んでいる地域は子育てをする人へ

表5 子育てに関する質問項目の単純集計結果

項目	概要
子育て経験の有無	ある83.4%、ない18.7%
子育てをしていた（いる）地域（子育て経験ありのみ）	伊仙町78.9%、徳之島町3.5%、天城町0.6%、奄美市0.6%、鹿児島市2.2%、それ以外の鹿児島県0.6%、沖縄県0.0%、その他13.4%
子どもの有無	いる81.3%、いない18.7%
子どもの人数（子どもがいる人のみ）	1人14.1%、2人24.6%、3人28.7%、4人21.3%、5人以上11.4%
高校生以下の子どもがいる世帯の世帯構造	一人暮らし6.0%、夫婦だけの世帯25.0% ⁵⁾ 、親と未婚の子の世帯50.0%、三世代以上で暮らす世帯2.4%、その他の世帯16.7%

の支援やサービスが十分に整っていると思いますか」と尋ねたところ、図3のように肯定層約4割（45.8%）、否定層約4割（46.2%）と評価がわかれた。必ずしも肯定層の割合が高いという結果は得られなかったが、これはワーディングの問題もあると考えられる⁶⁾。

前述の肯定層に対して、子育て支援やサービスが十分に整っていると思う理由を尋ねた結果が図4である。図4からは、「家族や親せきからの援助を受けやすいから」（60.6%）、「児童館や子育て支援センターなどの公的サービスが充実しているから」（37.5%）、「近隣住民からの援助を受けやすいから」（30.8%）という回答の割合が高いことがわかる。公的サービスや近隣住民からの評価についても回答の割合は高いものの、そうした中でも、とりわけ家族や親せきからのサポートが緊密になされていることがうかがえる。先にも述べた通り、伊仙町では「三世代以上の世帯」が多いわけではない。それでも、インタビュー調査でも聞かれたように、島内あるいは町内で近接別居をしていて、日常的にサポートし合える関係にあることがわかる。さらに、図5では「子どもを預かってくれたことがある人」を尋ねたところ、「自分の親」58.1%、「配偶者の親」43.2%、「配偶者」34.2%、「その他の家族」14.4%、「友人」11.3%、「近所の人（友人以外）」5.9%という結果が得られた。祖父母（自分の親と配偶者の親の両方）が子育てを大きく支えていることがわかる。

そうした家族のサポートに比べて、やや近隣住民のサポートが弱いことについては、頼もうとすれば近所の人に頼むことはできるが、伊仙町では近接別居している祖父母、その他の家族・親せきによる非常に緊密なサポートである程度は事足りているのであり、頻繁に近所の人に子どもを預かってもらうまでではないということだと考えられる。また、後でも述べるが、伊仙町では「親せき」「友人」「近所の人」をきれいに切りわけることができないからという理由もあると考えられる。

子育てをめぐる世代差もあると考えられるが、Uターン者である60代女性は、現在の状況と自身が子育てをしていた約30年前の状況について話している⁷⁾。この女性は子どもが3人いて、夫と共働きであった（現在は退職）。自分が子どもを育てていた頃は、今よりも隣近所に頻繁に預けるなどしてみんなで互いに協力して育てていたという。しかし、今は託児所や保育

所ができてそこに預けることができるので、今の人はまずはそうしているという。地域が子育てを具体的にサポートすることは、以前と比べると少なくなってきたように感じている。現在では保育所を利用でき、祖父母、きょうだいなどのその他の家族、親せきも子どもを預かってくれる。そのため、近隣住民に頼む前に事足りるということなのだと考えられる。

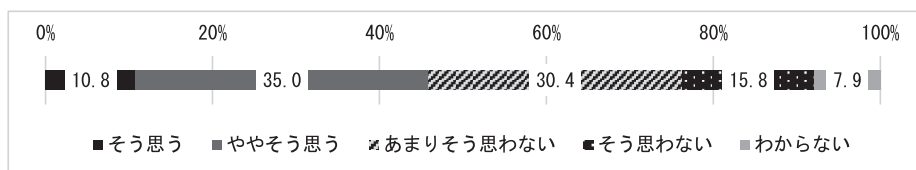


図3 子育て支援やサービスが十分に整っていると思うか

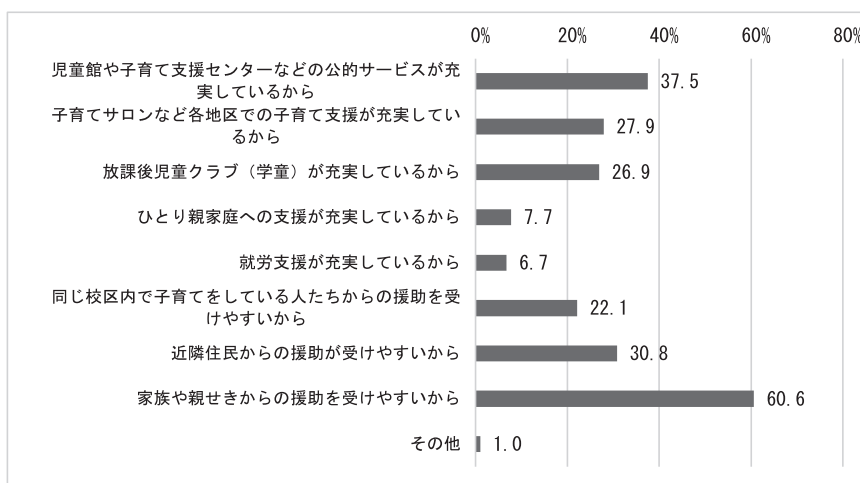


図4 子育て支援やサービスが十分に整っていると思う理由

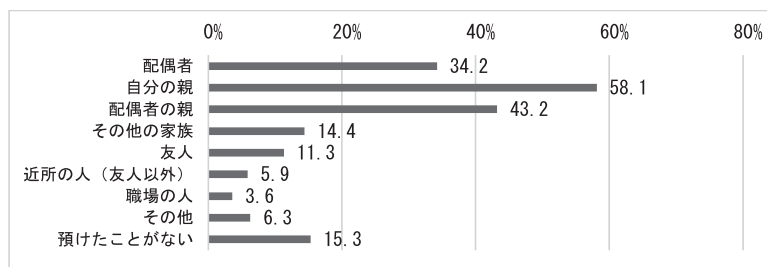


図5 子どもを預かってくれたことがある人

4.3 地域社会において子育てを支える構造——行事参加の観点から

次に、地域社会においてどのように子育てが支えられているのかをみていきたい。インタビュー調査においてよく聞かれるのが、伊仙町では「子は宝」という考え方があり、家族、親せき、地域が子育てを支援する環境があるということである。「この半年ほどの間に、ご近所の方々に対してつぎのような手助けをしたこと、またはされたことがありますか」として、その中の項目のひとつとして「子どもの世話」について尋ねた(図6)。その結果、「どちらもある」20.9%、「したことのみある」17.9%、「されたことのみある」3.3%、「どちらもない」58.0%となった。ここ半年の間に近所の人々と子どもの世話を「した」あるいは「された」人は、4割を超える(42.1%)。先ほど「子どもを預かってくれたことがある人」という項目の結果を確認した際には、「近所の人(友人以外)」の割合は低かったが、「子どもの世話」と広く尋ねた場合には回答の割合が高かった。

上記の結果からは、日々の生活において地域で子育てを見守っていく環境があることがわかる。しかし、伊仙町の地域社会における育児環境の一端は「出産祝い」からもより鮮やかに垣間みえるだろう。伊仙町において子育て経験がある回答者に、「出産祝いを持ってきてくれた人数」を尋ねたのが図7である。「50人以上」が5割を超え(56.6%)、「100人以上」も約3割を占める(28.5%)。

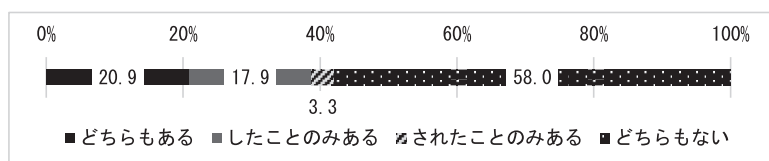


図6 近所の人々の手助け：「子どもの世話」

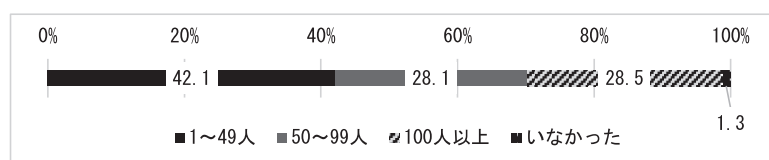


図7 出産祝いを持ってきてくれた人数

「出産祝い」と聞いてどのようなイメージを持つだろうか。伊仙町における「出産祝い」は家族や親せきのみが集まるものでも、友人が友人達だけでプレゼントを持って訪れるというものでもない(つまり、他の地域の人々がイメージする「出産祝い」とは異なる)。伊仙町では子どもが生まれると、数か月した後にお膳を用意してお祝いの会が設けられ、家族、親せき、近隣、友人、職場の人などが出産祝いを持って一堂に会する⁸⁾。図7も示すように100人以上集まることも稀ではない。たとえば、金曜日の夜に「出産祝い」が行われ、友人であれば3,000円を入れ

たご祝儀袋を持って主役の自宅に行く。到着するとまずは子どもの親に挨拶をして、お祝いのお酒を盃でいただき、お祝いの言葉を述べご祝儀を渡す。「食事を用意したので楽しんでいってください」と言葉をかけられ、空いている席に着く。お赤飯、お吸い物、刺身、おかず、お菓子がのったお膳が運ばれ、それらをいただきつつおしゃべりを楽しむ。こうした出産祝いの準備は、子どもの親だけではできないため、家族、親せきなども手伝う。しばらくして、ある程度参加者が集まり、冒頭の子どもの親への挨拶を終えたところで、参加者の中でも何名かが代表してスピーチを行い、当日の主役家族に関するエピソードを話す。さらにそのあと、出し物が行われる。子どもの親の友人が、参加者の前で三線（サンシン）をひき、唄を披露する。何曲か披露した後、最後には他の参加者も加わって、三線（サンシン）の音に合わせて歌い踊りながら、子どもの誕生を祝う。知り合いが多い参加者の場合は、一晩で複数の家の出産祝いに参加することもあり、いくつかの家を順番に回っていく。最初の方で訪問した家は中座しないといけないため、最も親しく長居したい家を最後に回る人もいるという。そのようにしてお祝いの宴は、参加者が出たり入ったりしながら夜遅くまで続く。

こうした集まりは、出産祝いの一回切りではない。子どもの誕生から始まり、入学祝い、成人祝いなど人生の節目を共に祝う風習がある。さらに、子どもの時だけでなく、高齢になっても、数え年の節目ごとにお祝いがなされるという（中村 2017）。お祝いの場に100人もの人々が集まることの意味をどう捉えるのか。100人もの人々が、何かがあったときにはサポートをしてくれる可能性があるということでもあるし、ここには、地域社会において人々が親せきでなくとも子どものお祝いに訪れ、子どもを大切に、誕生を祝い、共に喜び、見守っていく姿がある。生まれた子どもは、こうしたお祝いの場や行事が重なるなかで、世代を超えた交流があり、地域の人々に「〇〇さんの家の子ども」と認知され、その後は道端で見かけても、「〇〇さんの家の子ども」として見守りの目があるということになる。これらの場を通して、子どもが地域社会との接点を持ち、地域住民から認知され地域の一員になっていく。親だけが子育てをしないといけないうよりも、地域で見守る環境がある。インタビュー調査によると、伊仙町では子どもは幼稚園から一人で帰ってくるという。地域の見守りの目があるからこそこうしたことが可能なだろう。

加えて、出産祝いは、子どもが承認される場としてだけでなく、親にとっても「誇り」になり自尊心が高まる契機になるという。伊仙町に移住して子どもが生まれた女性は、出産祝いについて「自分が産んだ一番大切な存在を、周りの人が大切に扱うどころか神様に近い存在として崇めてくれる、そんな経験は生後間もない子ども自体の存在価値のみならず、その子を育てる両親の誇りにもつながる」（松岡 2016：97）と述べている。ここまで論じてきたように、出産祝いもそうだが、地域社会で子どもを支えていくという仕組みと価値意識が存在していることがうかがえ、地域社会で支えていく文化、子どもの誕生を祝う価値観が根付いている。家族、親せき、地域が支えてくれることからくる子育ての安心感もあるだろう。

さらに、地域において子育てを支える状況は、「出産祝い」のみから垣間みえるのではない。

伊仙町では、地域のさまざまな行事への参加がなされている。図8は地域行事への参加の割合を示したものである。「地域のお祭り」40.5%、「常会」40.0%、「近所のお葬式の手伝い」35.9%、「小学校・中学校行事への参加」28.9%、「道普請」22.8%となっている。「全く参加していない」人々は約2割（20.5%）であり、約8割の人々が日々の生活の中でいずれかの地域行事に参加していることがわかる。出産祝いにとどまらず、伊仙町における行事参加等の集まることを大事にした生活があり、それが地域社会における子育てを支える働きをしていることがうかがえる。

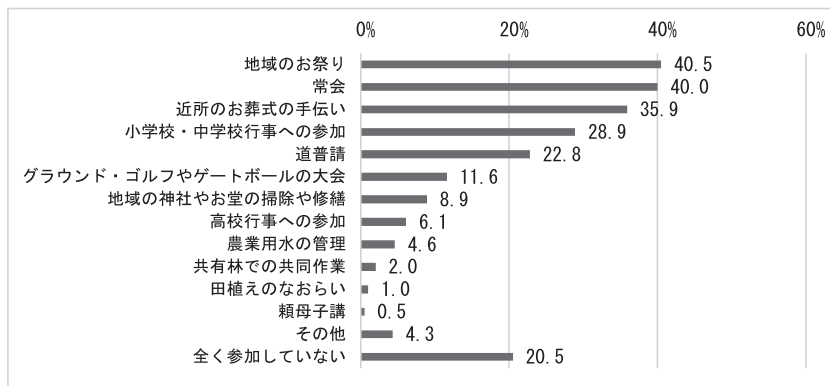


図8 地域行事への参加の割合

インタビュー調査においても、毎週婦人会の集まりがあるという語りや、校区文化祭があること、お祝いや葬式などでの集まりの場も多いこと、小学校の運動会には親だけでなく、地域の中老年や高齢者も参加することが聞かれた。子どもや家族と過ごす時間、親せきや地域の人々と集まって活動をする時間に幸福を感じる人々の姿がうかがえる⁹⁾。つまり、出産祝いをはじめとした伊仙町における活発な行事参加、集落単位での活動は、伊仙町住民にとって大きな意味を持ち、ここに伊仙町における生活の「豊かさ」の一端が示されていると考えることができる。伊仙町における子育てを支える構造というとき、それは、親や子を物理的に援助するひとつひとつの（祖父母、友人などの）ネットワークとして捉えることもできるが、それだけでなく、集落を軸にした活発な地域行事や集落活動の積み重ねがあり、そうした面としての子育てを支える土壌があることがうかがえる。

4.4 価値意識に関して

徳之島における高出生率には、「地域社会における子育てを支える環境」（具体的なサポート関係）だけでなく、「価値意識」が関わっている。すでに述べてきたこととも重なるが、人生において家族や地域での人間関係を重視する価値観があり、家族や地域で頻繁に集まることを楽しいと感じる人々の存在がうかがえる。図9は、家族や地域に関する価値意識の結果である。

「自分は家族のことが好きだ」という質問項目の肯定層は97.3%と非常に高い。「人生において最も大切なのは家族との関係だ」の肯定層も94.9%である。

地域に関する意識については、先にみたように、図2からは「今住んでいる地域が好きだ」の肯定層は8割を超え(84.4%)、「この地域のために何か役に立ちたい」も7割を超える(75.7%)。さらに、図9からは「近所の人のために何かをすることは負担ではない」と考えている人は65.8%である。伊仙町では家族への愛着が強く、家族や子どもをもつというという人生の過ごし方に幸福を感じていることがうかがえ、さらに地域への愛着も強く、地域の人々と集まり共に祝い過ごす日々、この地域で子どもと暮らしていくということに幸せや安心を感じていることがうかがえる。

インタビュー調査からも補足したい。伊仙町にUターンした30代女性は、夫と5人の子どもと暮らしている¹⁰⁾。共働きである。女性自身もきょうだい4人いたこともあり、夫婦2人のなかで、子ども3～4人は当たり前だという思いがあり、5人は欲しいと話していた。同級生も4～5人子どもを産んでいた。5人子どもがいると家事や仕事が大変だとは感じているが、それが苦痛ということではなく、島では子どもと過ごすことが人生の楽しみになると感じている。子ども、夫というような、人と接することが幸せであり、その延長が「子宝」という意識につながっていると話す。近くに住む親が子育てを助けてくれることも大きいといい、そのおかげで5人子どもを持つことができたという側面もあるという。

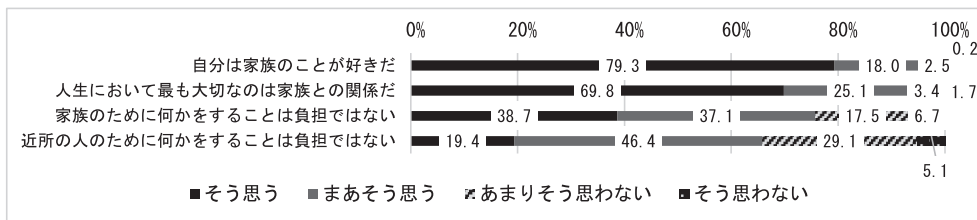


図9 家族や地域に関する価値意識

近所の人には子どもを預かってもらうこともあるが、お礼やお土産を渡したりということは全くない。近所の人とは互いに家族のように思っているので、逆に「お礼をしないで」と言われるという。すぐにお礼をするということではないが、家庭菜園で野菜ができた時におすそわけすることはあるという。地域では婦人会に入っていて、週1回夜に集まりがある。集落の昔の踊りを学んだり、年1回の校区文化祭での踊りの披露に向けて練習をしたりするという。婦人会では書道を習ったり、わら草履をつくったり、みそづくりを覚えてもらうこともある。年1回の校区文化祭では、小学生は演劇、婦人会は踊り、PTAは太鼓、特技がある人がマジックをしたりと楽しい。それぞれに役割があって行事も活性化している。女性自身も参加する喜びを感じている。この女性の事例からは、伊仙町で親に助けられながら、子どもや夫と暮らし、地域の活動にも頻繁に参加するというところに、忙しいながらも喜びを見出していることがうか

がえる。

4.5 子育ての長期的観点 ― 希望する教育程度と学費の見通し

他方で、子育てをめぐるのは、長期的な視点からもみていく必要がある。図10からは、「子どもの教育程度についての希望」に関して、大学約6割、専門学校約1割である。しかしながら、図11からは、子どもの学費の見通しが立っているかについては、経済的な面では不安がある層が4割弱みられた。ライフコースとしてみたときの教育達成の問題もあることがうかがえる。

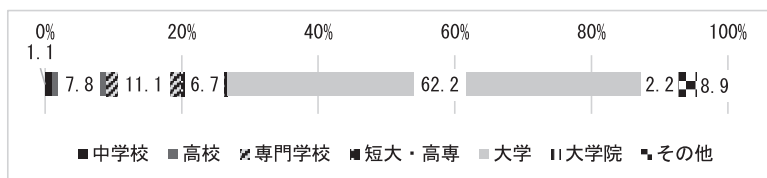


図10 子どもの教育程度についての希望

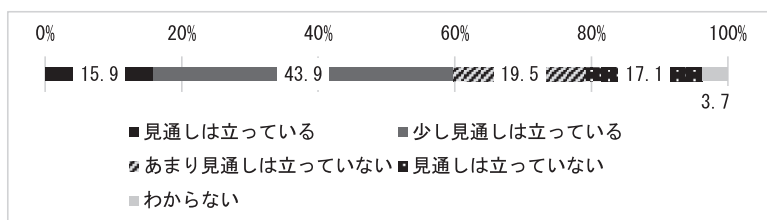


図11 子どもの学費の見通し

5. 子育てを支える地域社会

子育てに関する研究をめぐるのは、農村部や離島をフィールドとした研究はあまり多くはない。しかし、数少ない研究の中でも、沖永良部島をフィールドとした研究では、家族や近隣の人々との共同関係が形成されており、子どもを見守ってくれる人が多く子育てしやすいこと（徳野 2014；片桐 2002, 2005）、人々が人間関係の維持に金銭と時間をかけ、そのようなライフスタイルに魅力を感じていることが指摘されていた（徳野 2014）。今回の伊仙町における調査からも、先行研究同様に、家族関係や近隣関係の緊密さが、伊仙町における暮らしやすさや、生活における安心感を生み出し、子育てをしやすきことがうかがえる。本稿ではとりわけ伊仙町における「出産祝い」や行事参加について紙幅を取って論じてきたが、こうした活発な行事参加についても、沖永良部島を対象とした先行研究でも描かれている（徳野 2014）。集落単位や町単位の活動として、消防団の出初式、船こぎ競争（ペーロン競争）、駅伝、町民運動会、敬老のお祝い、町民文化祭などがあり、こうした行事は年中を通して開かれているという。

このように、沖永良部島や伊仙町における家族関係や近隣関係の緊密さが、子育てを支えて

いることがわかったが、他方で、家族関係や近隣関係では、子育てを支えるという時に、果たす機能が異なる可能性もうかがえた。家族や親せきに関しては、図5などでもみてきた通り、子育てに関する具体的な物理的なサポートをする存在として子育てを大きく支えていた。他方で、近隣の人々は、子どもの世話をするなど具体的な物理的なサポートも提供されるのだが、それとは少し異なる特徴もみられた。近隣の人々は、具体的なサポート機能だけでなく、図7や図8などでもみてきた通り、共に子どもの誕生を祝い、食べて踊り、活発な行事開催で日々の生活を彩り、子どもと親に承認されているという気持ちや誇りをもたらし、地域での生活により深い幸福をもたらしていた。さらに、地域行事を通して「地域の子ども」として新しく生まれた子どもの存在を認知して、日常生活においてもそれとなく子どもを見守っていく機能を果たしていると考えられる。

ここまで、家族や親せきと、近隣関係をわけて論じてきた。しかしながら、徳之島においては、必ずしも血縁関係にある人だけが「親せき」と呼ばれるのではなく、親しい人々が「親せき」と呼ばれることがある。反対に、血縁関係のある「親せき」が同じ集落に集まって住んでいて、近所の人々であると同時に、血縁関係がある場合もある。伊仙町における人間関係は、親せき、近隣、友人ときれいに切り分けられるものではなく、相互に重なりもあることを記しておきたい。

付 記

本報告は、日本学術振興会の研究助成による研究成果である（JP16H03695, JP19H01562）。質問紙調査は2016年度～2018年度科学研究費補助金基盤研究（B）16H03695「過疎地域の生活構造分析による人口減少に対応する地方社会モデルの再構築」（研究代表：高野和良、九州大学）の助成を受けて実施した。調査は高野和良（代表）・徳野貞雄・山本努・牧野厚史・稲月正・加来和典・山下亜紀子・松本貴文・益田仁・吉武由彩により実施された（敬称略）。調査にご協力いただきましたみなさまに感謝いたします。また、本稿は、日本家族社会学会第31回大会のテーマセッションおよび日本社会分析学会第143回例会にて報告を行い、報告原稿を加筆修正したものである。

注

- 1) 合計特殊出生率は鹿児島県や沖縄県の離島において高い（表1）（厚生労働省 2020）。ただし、こうした合計特殊出生率の離島における動向は、少子高齢化が進む過疎農山村の動向とも異なっており、一口に九州の農村や過疎地域といってもその中で多様性が認められる。
- 2) 伊仙町における子育てについて分析するにあたっては、行政施策の分析も含めて多様なアプローチがあると思うが、本研究では家族や地域関係に着目する。なお、徳之島の3町に

おける子育て関連の行政施策については、中村（2017）において論じられている。ただし、中村（2017）は「徳之島が『子宝の島』と言われる所以は、少子化進行に伴って国や行政が打ち出した最近の支援策ではなく、古くからある伝統的な子育てに答えがあるのではないか」（中村 2017：63）と述べ、「子は宝」という価値観の存在や活発な地域行事の存在についても論じている。

- 3) 本データの問題としては回収率の低さがあり、そのため回答者層に偏りがあることも考えられる。調査時期の後半が農繁期と重なったこと、設問数が多く回答負担が大きかったことなどが、回収率が低かった理由として考えられる。
- 4) 調査の結果の一部は高野編（2019）としてまとめられている。
- 5) 高校生以下の子どもがいるものの、「一人暮らし」や「夫婦だけの世帯」が一定数みられたことについて説明する。インタビュー調査では、伊仙町において小学校や中学校を卒業後、鹿児島市内の中学校や高校に進学する場合もあることが聞かれた。そのため、「一人暮らし」や「夫婦だけの世帯」が一定数みられたと考えられる。
- 6) 当初の予想に反して否定層の割合が約4割と高かった。この結果をどう捉えるのか。ひとつはワーディングに問題があったと考えられる。質問文の「子育て支援やサービスが十分に整っていると思うか」について、何をイメージするかが回答者によって異なっていた。「公的サービスや施設の充実度」を尋ねる項目だと考える回答者もいれば、「公的サービスに限らず子育て環境全般の充実度」を尋ねる項目だと考える回答者もいたのではないかと考えている。研究班としての質問の意図は「公的サービスに限らず子育て環境全般の充実度」を尋ねるものであった。しかし、今回「公的サービスや施設の充実度」を思い浮かべて、整っていないという回答をした人々が多くみられたのではないかと考えている。

インタビュー調査では、公的サービスというよりも、家族、親族、地域関係に支えられているから子育てしやすいということが聞かれた。公的サービスが充実していなくとも、子育てしやすい地域環境があるとインタビューからは考えられるものの、質問紙調査にてそれを検証可能なワーディングにできていなかった。注2でも言及したように、子育て関連の行政施策を整理した中村（2017）は、徳之島において他の地域と比較して特徴的な行政施策があるわけではないと述べ、徳之島における高出生率の理由は、「子は宝」という価値観の存在や、地域の行事など、地域社会における子育てへの理解やサポートにあると述べる。
- 7) 2016年12月12日の聞き取り調査より。
- 8) 2020年1月24日の出産祝い行事への参与観察より。
- 9) 2016年12月12日の30代女性への聞き取り調査より。女性は高校まで伊仙町で過ごし、短大進学のため他出している。短大卒業後、Uターンして徳之島で就職している。
- 10) 注9と同一の対象者への聞き取り調査より。

文 献

- 鹿児島県, 2021, 「徳之島の概要」, (2021年8月15日取得, http://www.pref.kagoshima.jp/ac07/pr/shima/gaiyo/tokunoshima/tokunoshima_top.html).
- 鹿児島県大島支庁, 2015, 『奄美群島の概況 平成27年度』.
- 片桐資津子, 2002, 「少子高齢化の『離島福祉』と家族研究——『沖永良部の家族関係』の類型化とその普遍化の試み」鹿児島大学全学合同プロジェクト『離島の豊かな発展のための学際的研究——離島学の構築 (No.2)』(調査報告書), 41-53.
- , 2005, 「奄美の出産と育児に関する地域・家族研究——少子化時代の相互扶助としての〈沖永良部の家族関係〉とパラサイト出産」山田誠編『奄美の多層圏域と離島政策——島嶼圏市町村分析のフレームワーク』九州大学出版会, 129-145.
- 厚生労働省, 1999, 「平成5年～平成9年人口動態保健所・市区町村別統計の概況」(2021年8月15日取得, https://www.mhlw.go.jp/www1/toukei/toukeihp/hc-cwvtv_8/index.html).
- , 2004, 「平成10年～平成14年人口動態保健所・市区町村別統計の概況」(2021年8月15日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuhoken04/index.html>).
- , 2009, 「平成15年～平成19年人口動態保健所・市区町村別統計の概況」(2021年8月15日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/other/hoken09/index.html>).
- , 2014, 「平成20年～平成24年人口動態保健所・市区町村別統計の概況」(2021年8月15日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/other/hoken14/index.html>).
- , 2020, 「平成25年～平成29年人口動態保健所・市区町村別統計の概況」(2021年8月15日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/other/hoken19/index.html>).
- 松岡由紀, 2016, 「都市の子育て・島の子育て——『子宝日本一』の町より」沼尾波子編『シリーズ田園回帰4 交響する都市と農山村 対流型社会が生まれる』農村漁村文化協会, 91-112.
- 内閣府, 2022, 「令和4年版 少子化社会対策白書(全体版)」(2022年9月15日取得, <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2022/r04pdfhonpen/r04honpen.html>).
- 中村ますみ, 2017, 「変わりゆく徳之島の子育て」『地域総合研究』44(2): 61-70.
- 高野和良編, 2019, 『「伊仙町生活構造分析調査」報告書1 (2016～18年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)』.
- 徳野貞雄, 2014, 「南西諸島の高出生率にみる生活の充足のあり方——沖永良部島和泊町の生活構造分析から」徳野貞雄・柏尾珠紀『シリーズ地域の再生11 T型集落点検とライフヒストリーでみえる 家族・集落・女性の底力——限界集落論を超えて』農山漁村文化協会, 173-224.